働く男のライフスタイル情報紙

Biz［ビズスタ］Life Style 特別版

2018 01

『Biz Life Style』は東京、神奈川、名古屋、関西、京都・滋賀、仙台、福岡、広島にて62万部発行
下記URLまでアクセスを。

www.biz-s.jp

広告掲載に関するお問い合わせ・申し込みは
TEL.03-6854-7001　FAX.03-6854-7005
企画・制作／株式会社デイリースポーツ案内広告社
〒1100015 東京都台東区東上野4-8-1 TIXTOWER UENO 14F
©2018 DAILY ADVERTISING AGENCY CO.,LTD

世界の頂点に立つ「グランドツアラー」の系譜。

現在からさかのぼること、およそ100年。自動車メーカーとして産声を上げたばかりの「ベントレー」は、当時の世界において、さぞかしセンセーショナルな存在だったに違いない。

自動車の生産を開始したのは1921年のことだが、驚くべきことに、2年後に初開催された「ル・マン24時間レース」に参戦している。第1回大会こそ4位に終わったものの、翌年に初優勝。7年間で実に5勝を挙げるという驚異的な戦績を収めた。

いまでこそF1と並ぶ超高速レースのイメージが強いル・マン24時間だが、自動車が発明されて間もない当時は、24時間連続で高速走行させること自体が難しかった。この頃のル・マン24時間は、自動車の高速性能と耐久性の実証舞台という意味合いが濃く、出場車も市販車と大きくは変わらないものが多かった。ベントレーは、ル・マン24時間で大成功を収めることで、自分たちの製品が高性能で耐久性に富んでいることを示したわけだ。

「私が作りたいのは、速くて、質が高くて、クラスでベストな車だ」

創業者のW・O・ベントレーが掲げた目標に応える形で開発された同社の処女作は、日本の年号がまだ大正だったこの時代に、時速130㎞近い最高速度をマーク。ルマン24時間の初優勝時には140㎞／hに迫る平均速度で一昼夜を走り切っている。当時の常識からすれば恐ろしく高性能で、驚くべきスタミナ。それは、ベントレーが「グランドツアラー」と賞賛される所以ともなった。

鉄道以外に高速で長距離を移動できる手段がなかった時代、人々は自動車に可能性を見いだそうとしていた。夏のバカンスで、イギリスから南仏のコート・ダジュールまで、ヨーロッパ大陸を越えるように自動車で旅する。ベントレーの走行性能と耐久性は、そんな使い方に最適だったのだ。

同社が「コンチネンタル」という車種を作り始めたのは、いまから60年以上も前のことだ。数あるコンチネンタルのなかで名作の呼び声がもっとも高いのは1952年から55年までにわずか208台だけが作られた「R-Typeコンチネンタル」となるだろうか。ルーフからテールエンドにかけてなだらかに下降する「ファストバック」と呼ばれるデザインで知られる2ドア・クーペで、高性能なエンジンとともに富裕層を虜にした。

この名車のスピリットを現代の技術で蘇らせたのが、2003年に誕生した初代「コンチネンタルGT」だ。V型をふたつ組み合わせたような精巧極まりない6.0リッターのW12気筒エンジンを搭載し、最高速は318㎞／hに到達。2011年にデビューした2代目は、初代のコンセプトをそのまま受け継ぎながらデザインとメカニズムを徹底的にリファインし、現代のグランドツアラーに相応しいクオリティへといっそうの進化を遂げた。

初代登場からの14年間で6万6000台以上が生産されたというコンチネンタルGT。その人気の源には、長い伝統に裏打ちされた高貴なブランドイメージに加え、どんなに長くハイウェイクルージングを続けても疲れにくいグランドツアラーとしての特質がある。職人たちが手作業で仕上げた最上質のレザーやウッドを惜しみなく使い、豪華そのものでありながら心やすらぐ空間を形成するインテリア。オーナーの好みに応じてデザインや素材を多様にアレンジできるきめ細かなサービス。そのすべてが、長い歴史を誇るイギリスの高級車ならではの魅力であり、「本物のラグジュアリー」を知る世界中の顧客から愛される理由なのだ。

そして、コンチネンタルGTは、また新たな扉を開いた。今回は、この魅惑の最新グランドツアラーのアウトラインを俯瞰してみよう。

BENTLEY

新型コンチネンタルGT プレビュー開催。1/20（土）・21（日）ベントレー東京（青山ショールーム）にて、ベントレー史上最高のグランドツアラーを体感。

クラシカルでオーセンティックな室内は、まさにベントレーならでは。その一方で、ダッシュボード中央上部に組み込まれたタッチスクリーンなど、最先端技術が多数導入されている。

0〜100km/hの加速は3.7秒、最高速度は333km/h。グランドツアラーとしての快適なクルージングと、低重心なスタイリングのイメージにふさわしいスポーティな走りの両面性を秘めた新型「コンチネンタルGT」。

伝統の気品、先進の走り。セレブリティをも圧倒する 存在感、新型「コンチネンタルGT」の魅力とは。

初代のデビューから14年の歳月を経て、英国、ベントレーの真髄ともいうべきモデル「コンチネンタルGT」が3代目へと生まれ変わった。その発表に際し、同社会長兼CEOのヴォルフガング・デュルハイマー氏は、次のように述べている。「ベントレーは100年近くにわたってラグジュアリーなグランドツアラーの世界を牽引し続けてきました。3代目のコンチネンタルGTは、私たちのデザインとエンジニアリングが到達したひとつの頂点であり、次世代ベントレーの記念すべき第一歩を記すものです」

彼の言う「次世代ベントレー」とはいったいどのような車なのか。その一端は、ここで紹介した写真からも十分に見て取ることができる。

グランドツアラーとは、高速での長距離移動を得意とする車と考えればよい。したがって、長時間を過ごす室内を快適なものとするためにも、そしてロングクルージングを余裕でこなすスタミナを視覚的に表現する意味からも、その車体は「余裕あるサイズ」とイメージする向きが多い。

実際、ボディサイズもキャビンの広さも、先代までとほとんど変わらない。ところが、3代目コンチネンタルGTは、まるでスポーツカーかと見紛うほどに重心が低い、いかにも軽快で敏捷そうになったという印象は、実は正しい。サイズに大きな変化がなくても、エンジンをはじめとするメカニズムでは、スポーツカー的なポテンシャルが大幅に引き上げられたからだ。

時にはスポーツカーのようなパワフルな走りを、またある時にはグランドツアラー本来の快適な走りを。高度な電子制御技術によって実現した走りの両面性をデザイン面でも見事に表現したのが、3代目コンチネンタルGTのスタイリングなのだ。

この「低さ」は外観上の大きなポイントなので、もう少し掘り下げてみよう。まず目に付くのが、やや背が低くなったフロントグリルだ。視覚的な重心がグッと下がったのは、幅広のグリルを低いポジションに配したことも大いに貢献していることになる。さらに、前輪の位置を従来と比べて135㎜も前方に移動。結果的にロングホイールベース化を果たすと同時に、しっかりと大地を踏みしめているイメージがいっそう強まった。ボディサイドの低い位置を水平に流れるシャープなキャラクターラインも、低くうずくまるようなスポーツカー的フォルムを強調するのに役買っている。

リアセクションでは、ルーフから一直線に伸びるリアウインドウのラインを長く伸ばし、シンプルなテールエンドを路面に近い位置に設けることで、安定感とワイドなフォルムを強調。すっきりしたデザインに改められたテールライトも、スポーツカーらしい軽快感を強く印象づけている。

こうした外観の特色は、単なるギミックではない。前述したように、メカニズムのポテンシャルが大幅に向上したことを忠実に反映したものなのだ。というわけで、パワーユニットへと目を移そう。W12.6リッターの基本レイアウトこそ変わらないものの、燃焼室内に直接燃料を噴射する直噴方式と、燃焼室に入る手前のポートに噴射する方式を使い分けるデュアルインジェクションにより、635psの最高出力と900NFmの最大トルクを実現。従来型を大きく上回る数値だが、それでいながら燃費を大きく改善し、二酸化炭素の排出量も16%低減した。

生粋のスーパースポーツカーを彷彿とさせるスペックは、ギアボックスでも見て取れる。世界中のスーパースポーツカーが好んで用いるデュアルクラッチ式の採用は特筆すべきだろう。トルコン式に比べて素早くダイレクトな変速を可能にするとともに、緻密な制御によりスムーズなシフトフィーリングを実現。グランドツアラーに求められる快適性を維持している。駆動方式は新たに「アクティブオールホイールドライブ」を採用。必要に応じてトルクを全輪に配するシステムに一新。スポーティーで軽快なハンドリングと4WDならではの力強いトラクションを両立させた形だ。

次にインテリアだが、もしかしたらメカニズム以上に大胆な変革が導入されたと言えるかもしれない。キャビンは極めてラグジュアリーで、本物の素材だけが生み出せる優雅さと落ち着いた雰囲気。つまり、ベントレーの伝統はそのまま守られているのだが、写真を見ると、たとえばダッシュボードに収められている大型ディスプレイにお気づきだろう。現代の自動車にタッチスクリーンはなくてはならない存在だが、それが「ベントレーのキャビン」の印象を壊すことは許されない。そこで同社のデザイナーたちは、細心の注意と緻密なデザインによって、完璧な形で周囲に溶け込ませることに成功したのだ。さらにディスプレイを回転させてウッドパネルに切り替え、周囲と完全に一体化する「ローテーションディスプレイ」というメカニズムまで用意された。コンピュータ制御の学習機能が盛り込まれており、回転精度は何と0.15㎜以下。この結果、一瞥しただけではすき間がまったく気にならないほどの完成度を実現している。

室内の進化は、ハイテクに関わることばかりではない。ダッシュボード、全体を覆うウッドは、上下に2分割されて別々の素材を選択できる「デュアルヴェニア」が初めて採用された。「ダイアモンド・ナーリング」と呼ばれる新しい装飾加工も、新型コンチネンタルGTとともに登場した新機軸のひとつだ。ただ気品や美観を追い求めるだけでなく、操作した際の滑り止め効果にも注意を払った結果、美しく光り輝くふたつの面の間に0.07㎜の段差を設けるというこだわりぶり。ダイアモンド・ナーリングは、伝統的に「フルスタイ」と呼ばれるエアコンの吹き出し口や主要なロータリースイッチなどにオプションでオーダーできる。

さらに、同じダイアモンドをモチーフにしたインテリア加工、「ダイアモンド・イン・ダイアモンド」と呼ばれる特別なキルティング・ステッチも見どころだ。ひとつのひし形を作るために何と72針の刺繍が施されているというのだから、ただ驚くしかない。

伝統と重んじながらも、これまでに無い価値の創造に取り組むベントレー。この新型コンチネンタルGTは、全国6会場で開催予定のプレビューイベントで初公開される。完全刷新されたベントレー史上最高のグランドツアラーの魅力を体感できる絶好の機会、詳しくは次ページへ。

635馬力／900N・mと大幅なパワーアップを実現した6リッターW12 TSIツインターボエンジン。

全長4,850×全幅1,954×全高1,405mm（欧州仕様参考値）。80kg以上の軽量化も実現している。

ウッドパネルの木材をはじめとする「本物の素材」も魅力。手間と労力をかけてこその気品なのだ。

ひとつのひし形の内側にもうひとつのひし形を刺繍で描く「ダイヤモンド・イン・ダイヤモンド」の新ステッチ。内側のひし形は1辺ごとに糸の向きを変えることで、光の具合によって輝き方が微妙に変化する。

新型コンチネンタルGTには合計で10㎡を越えるウッド素材を使用。職人が手作業で埋め込むには実に9時間を要する量だという。なお、エアコンの吹き出し口などの縁取りにはブロンズのインサートが使用され、細やかなディテールを演出する。

発表と同時に大きな話題を呼んでいる「ローテーションディスプレイ」。気品に溢れたウッドパネルが回転し、タッチスクリーンやデジタルクロックターンが現れる驚きの仕組みとなっているので、ぜひ体感してみたい。

互いにコーディネートするように楕円形デザインが採用されたテールパイプとテールライトが印象的なリアセクション。スポーティなイメージが強調されている。

My Favorite Life Style

新型コンチネンタル GT　（メーカー希望小売価格）25,300,000 円

The new Continental GT.

Be Extraordinary.

新型コンチネンタルGT プレビュー開催

完全刷新のベントレー新型コンチネンタル GT をベントレー東京にて初公開致します。
躍動的で揺るぎないパフォーマンス、ハンドクラフトから生み出されるラグジュアリー、
そして最先端テクノロジーとが三位一体となった史上最高のグランドツアラーをお確かめください。

開催日時　1月20日（土）・21日（日）
10:00-18:00

開催会場　ベントレー東京 ショールーム
TEL: 03-5413-2145
〒107-0062 東京都港区南青山 2-5-17

ビズスタ特典　期間中にご来場の上、ご商談頂いたお客様にベントレーコレクションよりグッズを進呈致します。
※本誌を見た旨をスタッフにお伝えください。賞品が無くなり次第終了とさせて頂きます。

BENTLEY TOKYO

写真はコンチネンタルGTです。表示価格は2018年モデルの2017年12月1日現在の消費税込メーカー希望小売価格（参考価格）です。オプション費用、保険料、税金（消費税を除く）及び登録等に伴う諸費用は含まれておりません。販売価格は正規販売店が独自に定めておりますので、お問い合わせ下さい。使用した写真は細部で日本仕様と異なる場合があります。「Bentley」の名称、「ウィングドB」およびその他あらゆるモデル名は登録商標です。© 2017 Bentley Motors Limited.